

京鹿子

昭和二十一年八月一日発行
全一冊 八八頁 二角 三行

8月号

鈴鹿 呂仁

拾掬集 その九十五



繩跳びの波に抱かれるゆすらの児
一輪車ゆすらの風をまとひをり
あかときの山河は青しほととぎす
ほととぎす夕日の影に女人堂
てにをはの句種の育つ芒種かな
一因は一雨の雫蜘蛛の糸

花道の表舞台へ蛇の衣

大阪支部大会・守口

夏帽子遺跡の街をぶら歩き
文禄の翳を背に黒揚羽

吟行・大徳寺界隈

梶子の風の背に消ゆ女傘
竹林の静寂のさ揺れ梅雨の蝶
方寸の白砂の空^{そら}や我と蟻
塔頭にもものふの毘羽黒揚羽
片蔭や築地連なる寺の町

近詠

名譽顧問

和田 照海



浮苗

城山の風浮苗にしてしまふ
山の子に 研日 和や 閑古鳥
星の田の水盗み合ふうるし闇
病葉や不貞寝をきめて力石
被爆ドーム崩さぬやうに啼く夜鷹

近詠

名譽顧問

塩貝 朱千



薔薇の雨

初蝶と綺麗な風と人を待つ
名刹や大山蓮華の香の閑か
青楓迷ひの窓に四苦もなく
肩撫でるだけの再会薔薇の雨
応へなき答を探す五月の海

神麓集

近詠

福主宰

村田あを衣



薄暑

生涯の出会いの一行春の蟬
未来の二枚合せて薄暑来る
牡丹散る語りつくせし月あかり
薔薇を活け君へ添ひたる六十年
つまづきの影立ち直る立夏かな

枝豆 沼田巴字

枝豆の荒々しさよ京の北
大豆煮る大いなる飢ゑ思ひつつ
軽やかに散る定めかな初嵐
たそがれの遠山見たり秋隣
ありし日の幸不幸かな颯雲

麦の秋 植村蘇星

博学に優る雑学苔の花
先人の美しき言の葉更衣
累代の天空染むる麦の秋
なよなよと早苗素直に根付きをり
白雲のなびく峰寺緑濃き

蝶 直江裕子

影さして蝶がひとりじやないといふ
桃咲いてひとが毀れる透きとほる
いたぶつてみても独り花のあとさき
春はうつぶせ零れるから失くすから
行きつくのはいつも西行のさくら

言ひ伝へ 高木晶子

住み慣れし家毀つ日の黄砂降る
残されし一本の樹に青嵐
新茶畠一日正しく終はること
鯉幟空は川より自由なり
水蓮は水平に咲く言ひ伝へ

神麓集

野火放つ 伊藤 希眸

老鶯の山裂る声は神を呼ぶ
木蓮の時空越えたる花咲けり
青田かな畦に渦巻く蛇の群れ
フェルメールのやうな娘の前野火放つ
積まれたる芹になづ菜に店は野に

発 芽 奥田 筆子

流星や出合頭のデリバリ車
玉葱や流されつつも発芽して
燕の巢見捨てて不意に引越しす
竹皮を脱ぐや一冊読みきりぬ
裘廃品にして重きかな

八月の風 井上菜摘子

八月は答の出ない風である
何耐へてゐるひまはりの棒立ちか
ひるがほの半端な時間吹かれをり
飽きましたカンナの赤に告げられず
ひぐらしやかなたに母の灯がともる

海宇咲く 山中志津子

十字架の塔はまなび舎新樹光
海宇咲くとほき潮鳴り呼ぶやうに
しじみ蝶こころの旅路よぎりけり
春惜しむ姿それぞれ鬼の里
縄飛びの子等よ地雷を踏まぬやう

神麓集

梅雨某日 井尻 妙子

約束の一つ残して梅雨上る
余命宣告梅雨某日の空の色
プライドの欠片あつめて梅雨に倦む
三時間待ちの行列梅雨晴れて
梅雨寒や只今五体誤作動中

心揺れ 鷺山 珀眉

バイオリンケースの中の青嵐
草矢放つ君を忘るるため放つ
明易し未読の本を山積み
人間を少しはみだす更衣
虎尾草のゆれては人の心揺れ

青き踏む 亀井 福恵

膝笑ふことを諾ひ青き踏む
牧はるか白詰草の呼んでゐる
天上にありし奈落や揚雲雀
花ぐもり年端の行かぬ喪主なりし
藤懸けて風のたぐひを鎮めたり

をむな心 西村 白杼

薔薇の字のやうに微妙をむな心
天空の城へと向ける鯉のぼり
一灯にひとつの思ひ陽炎燃ゆ
恋ごころ未だ沸く微熱植田かな
父情とは語らぬままや花槐

神麓集

安らぎしづく

菊池 和子

緑雨と言ふ安らぎしづく五七五
白玉のつるりとにげる過去の棘
気が付けば読点ふたつ夏立てり
裏腹の言葉の裏に沸く清水
薔薇の朝昨日の思ひ今日迷ふ

燕の子

本郷 公子

水城の礎石に地蔵松落葉
指切りし紙一瞬の若葉寒
万能茶煮出す朝や燕の子
月見草亡夫の未使用原稿紙
陽光に銀の輝き鮎遡上

牡丹道

安田 優歌

花鳥愛し共に老いるも牡丹道
紫折戸の石楠花あかり香袋
ぼうたんや雲間のひかる小宇宙
七いろの若葉をわたる風無辺
生涯の閉ぢ方を問ふ暮春寺

花

筏

石原 孝人

先駆けも遅参も許し花筏
夏草や考が手艶の鎌を研ぐ
春眠を踏み付け猫の大欠伸
風の裏見せて海まで飛花落花
潮騒の消えて広がる春夕焼

神麓集

春の月

佐藤 千恵

春三日月魔女の残像のこりたる
看護師のひそひそばなし春の月
春闌ける使はぬ椅子のそのままに
病む人に耳近づける若葉の夜
椎匂ふメントモリはさておいて

一つ葉

山田 和

一つ葉やあぶり餅屋の古庇
翳となり翔ちし夏蝶信長廟
老鶯や苔に埋もる遥拝石
ふ・ふ・ふと夏蝶消ゆる宙の碧
潮引きて足取りかろし夏通路



鈴鹿野風呂 十句（昭和五年）

道を説く師を酔はしめよ年忘
鈴振つて巫女の授くる破魔矢かな
雨寒き白梅に来つ詩仙堂
醍醐寺の内外の道の草青む
春光や窓のほとりに芽ぐむもの
掛けてある遺品の軸や深山蓮
露涼し萩のこぼるる頃思ふ
いつしかにふえし俳書や土用干
梅干して年々古りし蕙かな
廣澤を心あてなる月の道

（真由美抄出）

英華採集

人生は片道切符蟬の穴

京都 岩佐英子

人は生まれ体内に片道切符を埋め込まれる。その切符は生まれた日付の刻印があるものの行先の無いもので有効期限が記載されていない。この切符の使い道は本人に委ねられる。片や蟬の一生は先ず樹皮に産み付けられた卵が翌年幼虫となり地に落ち地中で4年から7年かけて成虫となる。その後、地上に出て脱皮し蟬となる。蟬の片道切符は、蟬穴を出た時に授かるのではないか。しかし、周知の通り蟬の一生は短い。この取合せの句は、夫々の一生の長短を巧みに響き合わせている。

朧夜の窓辺は過去の出入口

福山 武藤弘海

「菜の花畠に入り日薄れ・」。朧月夜という唱歌を知らない人はいないだろう。誰も「口ずさんだこの歌は、日本の原風景をそのままの詩になっている。掲句の作者は、朧夜の窓辺に立った時にベールに包まれた神秘的な過去の淡い思い出が脳裏に浮かんだのである。その世界に迷い込んでみたい衝動に駆られると後は勝手に身体が過去へと夢遊し始める。現在の世界と過去の世界へ自由に出入りするこの窓辺は作者にとつての逃避の場所である。

許容量てふ門いくつ杉花粉

福山 守屋桜子

植物の花粉により引き起こされる花粉症は、杉花粉が抗原となる場合が多いと言われ、有病率はこの十年で10%も増えて全国で4人に1人が悩まされているらしい。花粉が身体に入ると抗体が出来、その量が限度を超えると発症するので掲句の許容量はこの抗体の量と言え。出来れば花粉の侵入を防ぎたい、その為の対策が「門」なのだろう。日本の国民病と言われる花粉症もその病を経験しているからこそその一句であり表現の諧謔性に妙がある。



京鹿子集

鈴鹿呂仁選

水琴集

福山 門井 千歩

薄暑光少女の素足遅しき
草案にあらず蜘蛛の囀揺れてゐる
飽食の猫のつそりと夏夕べ
マニキュアの拭きて一人の夜半の夏
反抗期風船葛ゆれ止る

習志野 上野 紫泉

風に臥し陽に起き春の野が動く
風神の目を抜きさぼる鯉幟
遁走の蜥蜴ジュラ紀の尾が遊ぶ
万緑へ人間を乗り継ぎに行く
山笑ひ鳥啼き海は波を呑む
季語となる具材たつぷり春サラダ
ひとことと言へば凡人蛙の子
春一番二番は嫌と言ふ娘
黄砂ふるシヨーウインドーの高級車
花ぐもり墨色薄き女文字

政時 英華

囀りの寝釈迦を起こす東山
奥嵯峨の風も白きに余花残花
波音の中のベンチや比良霞む
著我明り木曾殿鎮む句碑二十
湖風の長閑にわたる近江橋
鯉のぼり風を選び分け高階の
夏めくや青の礫に波をどる
大釜の筍もはや我を持たず
サイフォンの煮出しの音や街薄暑
紅唇の長き足組みサングラス
絮たんぽぽ吹いて遠のく反抗期
余花の雨ビル風といふ小悪魔
桜に実女子大の門ゆるぎなし
暮の春どこか可笑しき生返事
退院の一步の軽し青葉風

宇治 北田せい子

京都 中村椅久子

塩見かず子

笹の世を垣間見てお興入れ
睡蓮にモネの心眼真を衝く
嵯峨野路の大曲りして著我の花
隴夜の窓辺は過去の出入口
真帆片帆沖の往来霞みけり
のつたりと一湾春の灯を集め
春泥に歩幅とられし一年生
ぐづぐづととまどふ季語や春の風邪
許容量てふ門いくつ杉花粉
子雀の独りに空は広すぎる
日の本を巡り囃せし桜かな
水切りの少年寡黙夏立ちぬ

福山 武藤 弘海

守屋 桜子

人生は片道切符蟬の穴
五月晴れ句縁戴き四十年

岩佐 英子

鯉いま相模の沖を北上中
老鶯の出迎への声雨上る
北条の栄華を偲ぶ五代祭
求愛のぴよんぴよん跳ねる睦五郎
万緑や一樹一樹の自己主張

戸田 遠山 悟史